

研究経過報告（平成元年後半～平成3年前半）

速水敏彦

平成元年7月から平成2年8月にかけてはフルブライド若手研究員としてアメリカ合衆国のUCLAで学ぶ機会を得た。30代の私自身の中心的な研究テーマであった「達成動機づけの原因帰属」に関してその論理的支柱ともいえるB.ワイナー博士のもとで新たな研究を進めることができた。ワイナー博士の研究室を訪れた最初の日、博士は鼻歌を歌いながら広いキャンパスを案内して下さった。しかし、次の日に私は「君はどのような研究計画をもってここに来たのか。」と厳しい口調で責められた。人間的にはユーモアがあり親しみやすく、心遣いが細やかな人であった。しかし、研究にはきびしい面をもつ人でもあった。週末も大学に来ていることは希ではないようであったし、研究室からは一日中、博士自ら打つタイプの音が聞こえてきた。

さて、私は冬学期（1月から3月）に心理学を受講している学生を対象にして「原因帰属の次元の分化度と自発的原因帰属の関係」の研究を行った。これは日本でいえば1時間の授業時間ですむ調査であったがUCLAでは授業時間中に調査をすることは許されておらず、少人数づつ空いている時間で行うことになり、データをとりおえるのに4、5週間もかかってしまった。心理学の受講生は単位を取得するためには授業以外に8時間ほどこのような調査や実験に協力せねばならないようであった。これは研究する側からいえば、実験は確実に被検者が確保できるという点でよい制度といえるが、調査に関しては効率的な方法とは言えない。

春学期（4月から6月）にデータの整理を行った。私は心理学部から他の学部に繋がれているコンピュータでSPSSを利用して統計処理を行ったが私が利用した当時は計算も紙代も無料であった（その後、有料になったらしい）。

私は当初、「原因帰属次元の分化度が高いほど自発的原因帰属する傾向が強い」と予想していたが結果はあまりクリアなものではなかった。そこで、この問題はさらに検討を続けることにして、同じ調査から別の問題に焦点をあてて在外研究中の論文をまとめた。これは後述しているワイナー博士との共著の論文である。

正直なところ、在外研究期間中、私が最も時間を費やしたのは大学での研究ではない。語学の勉強にと家の近

くのアダルトスクールに通ううちにそのような学校について日本の人たちに紹介してみたいと思うようになった。わが国にも最近は多くの留学生や外国人労働者がやってくる。しかし、かれらに日本語教育をする十分な公的機関はない。アダルトスクールをモデルにした公的機関の設立を日本でも考えるべき時期ではないかと思う。アメリカのアダルトスクールでは学習者や教師への面接、学習者への調査も行ったので心理的側面にも言及し、紹介したい。しかし、専門外のことでもあり、帰国して1年も経過した今もまだ、十分構想がまとまっていない。

以下にこの2年間に刊行されたものをあげる。

I 著書

教室場面における達成動機づけの原因帰属理論 風間書房 1990年

II 分担執筆

社会状況の変化と青年 久世敏雄編「変貌する社会と青年」福村出版 1990年 3-26.

人それぞれを理解する 久世敏雄・梶田正巳編「教育の心理を探る」福村出版 1991年 106-133.

子どもに対する親の評価・教師の評価 渋谷憲二編著「指導と評価の間 学習意欲を育てる教育指導」ぎょうせい 1990年 273-294.

学業不振と教授行動 滝沢武久・東洋編「教授・学習の行動科学」福村出版 1991年 277-290.

原因帰属 宮本美沙子編「新・児童心理学講座7 情緒と動機づけの発達」金子書房 1991年 221-264.

III 論文

高校生における学習の動機づけ過程 一達成目標に着目して— 文部省特定研究「教育の場における相互作用の実証的総合的研究」報告書 名古屋大学教育学部 1990年

Bernard Weinerと共に A Test of Dweck's Model of Achievement Goals as Related to Perceptions of Ability. Journal of Experimental Education, 1991, Vol. 59, No 3, 226-234.

潘益平と共に 子どもの達成目標傾向 一親の働きかけの認知と達成行動に関連して— 名古屋大学教育学部紀要 1991年（印刷中）